

2025年度学校評価（慶應義塾高等学校）

本校の教育理念	学問の修得に基づいた「独立自尊」の精神を育て、気品と智徳を備えた生徒を育成することを目標とする。
本校の特色	本校は、創立者福澤諭吉の精神に基づき、小学校から大学に至る一貫教育において、中等教育の中核を担うものである。従って、在校生が慶應義塾大学へ進学することを前提として教育方針が定められる。また、本校は大学と隣接しており、カリキュラムあるいはクラブ活動などにおいて、大学との密接な連携がなされる。一貫教育校として、大学そして小・中学校との連携は学校教育の全ての面に関わるもので、今回の学校評価においては、特別の項目として取り上げてはいないが、個々の項目にその要素が含まれる。
学校評価の経緯と今年度の評価対象	本校では、平成20年9月に初めて学校評価委員会を設置した。今年度は教育活動（必修科目・卒業研究）、特別教育活動（クラブ活動・生徒会）、安全管理、運営（図書）、学校いじめ防止方針に基づく取組の実施状況について点検・評価を行う。達成度については担当者判断、または生徒によるアンケートを実施し、A～D段階で表示する。

評価項目	取組目標	具体的な方策	達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
教育活動					
必修科目	国語 読解や表現活動を中心に授業を行い、論理的思考力、表現力、語彙力の向上を図る。古典では、伝統文化の本質や古典を学ぶ現代的意義の体得を試みる。	幅広い時代の多様な文章に触れる。読解に加え、考えを持ち、自らのことばで表現する機会を設け、理解が深まるよう導く。	各担当者の特色を生かしながら、豊かな知識の獲得を基盤に、考える力とことばで表現する力の涵養を促した。	A	語彙力や文法事項への理解等、基盤となる学力の向上をはかり、言語活動の充実によって読解力・思考力の養成に努める。
	地理歴史 地理的および歴史的な見方・考え方を養うために、多面的・多角的に地理的事象および歴史的な事象を理解し思考する力を身に付けさせる。	資料や映像などを用いて、生徒の興味関心を高めるとともに、生徒が主体的に取り組み理解を深めることを促す。	実習作業や記録・映像等を活用し、地理的・歴史的な事象への理解を深め、生徒の思考力・表現力の向上を図った。	B	個人の高い情報リテラシーが求められる現代社会において、社会状況を適切に理解し、個人や社会が進むべき方向を主体的に考察する機会をより増やしたい。
	公民 政治・経済・法律・倫理・哲学といった幅広い分野を扱い、深い知識と教養を身につけることを目的とする。	知識の習得に特化することなく、生徒との双方のコミュニケーションをとりながら授業を展開する。	ディベートなどの学習活動を通じて、概ね達成できたと思われる。	B	一方的に説明する講義型授業ではなく、 ・発問を工夫する ・生徒に考えさせる時間を確保する ・意見を共有させるなどを通して、教師と生徒、生徒同士の対話を生み出すよう心がけたい。
	数学 基礎・標準的な内容を確実に定着させつつ、高度な内容まで幅広く取り扱い、大学での専門的な内容を学ぶ上で必要な力を身につける。	丁寧な解説および演習を通して学習事項の理解を促す。理解が不十分な生徒に対しては補修や課題を通じて補う。	各生徒の能力・関心に合わせて授業展開を行い、また、適宜補習・課題なども行うことで概ね実力を伸ばすことができた。	B	優れたノウハウや教材を教員間でより細かに共有し、集団として各生徒の学力を伸ばせるようなシステムを作る。
	理科 幅広い科学の知識を身につけ、身近な現象が科学と密接に関係していることを理解し、科学的な思考法を習得する。	授業を通して基礎知識の定着を図り、体験的な実験、観察等を行うことにより思考や理解を深める。	講義・実験・演習を三位一体として、基本的な内容から応用の範囲まで理解を深めることができた。	A	生徒の多様性への対応の充実。Teamsやデジタル教材などのさらなる活用的一方、体験的な教育もより充実させ、バランスのとれた教育をめざす。

評価項目	取組目標	具体的な方策	達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
必修科目	保健体育 身体活動を通じ、技能を高め、将来の健康的な生活習慣の礎を築く。健康について正しい知識を学習する。	個人・集団スポーツを偏りなく授業に配分する。BLS教育を通じ、「命」の尊さを学習する。	個人・集団スポーツを偏りなく配分し実施できた。BLS教育を通じ、「命」の尊さを学習することができた。	A	安全・危機管理への配慮を行う必要がある。体力・技能に差があり、個々に対応した指導が必要である。
	芸術 諸活動を通じて、個性を生かした表現力を伸ばし、芸術に関する幅広い知識・鑑賞能力を身につける。	講義・実習を通じて基礎的な表現方法を会得する。また芸術作品を鑑賞することにより個々の感性を高める。	講義・実習を通じて、概ね目標を達成できた。	A	知識・表現力に対する評価方法はある程度確立しているが、感性を測る方法を今一度模索する必要がある。
	外国語 英語 4技能（聞く・話す・読む・書く）をバランスよく引き伸ばしながら、多言語・多文化への理解を深める。	語彙・文法事項の習得をしながら、様々な言語活動の機会を多く提供する。	引き続きTAの活用もあり、授業内で生徒に言語運用を促すことができた。	A	即興型ディベートへの参加など、新しい英語活動の検討を継続したい。
	第二外国語 「読む・書く・聞く・話す」の4技能を伸ばし、総合力を高め、異文化理解も深める。大学の学習にも繋げる。	2年間の継続学習を念頭に、3年次でより実践的な活動もできるよう、2年次から向上心と意欲を高める工夫をする。	生徒のレベル差が見られる部分もあったが、4技能を意識したバランスの良い授業を展開することができた。	A	①定期的に発音チェックを行い修得を促す。 ②リスニング練習の回数を増やす。 ③実践の機会をさらに増やす
	家庭 家庭生活に必要な知識と技能を身につけると共に、持続可能な生活を営むための課題について学習する。	様々なテーマを取りあげ、講義と実習・体験により学習する。調べ学習とその発表会を実施する。	概ね達成できたが、まだ十分とは言えない。	B	実践的・体験的な学習活動をより充実させ、知識及び技能の定着を図る。また、学びを共有しやすい発表の形式を検討する。
情報 生徒間の既習内容に差があるプログラミングに関して、どの生徒にもフィットした学習となるようにする。	自学自習型の教材を工夫するとともに、チーム・ティーチングによるきめ細かなサポートを行う。	十分な理解がないまま作業に終始してしまう生徒へのアプローチが課題である。	B	自らの理解を確認するための活動を折々に取り入れるなどして、作業に終始してしまう生徒の行動を変えることを試みる。	
選択科目	国語 必修の授業では扱いにくい発展的な内容の教材に取り組ませることを通じて、言葉や伝統文化に対する探求心をより一層高める。	担当者の専門性を生かし、特色ある作品を読み込む。自分で課題を設定し思索することを通して、実感を伴った理解につなげる。	各担当者が創意工夫し、さまざまな作品に対する多様な知見と批評力の獲得に努め、より高度な思索を実践できた。	A	引き続き履修者の人数を考慮しながら健全な授業運営を行い、言語活動の充実によって理解の定着を促していく。
	社会 高校最終学年として、政治・経済・法律・歴史、各分野の理解を深め、思考力を高める。学部選択の一助となることを目的とする。	各分野において、大学での継続を意識して授業を構成する。具体的には高大一貫講座をはじめとする大学との連携を図った授業を展開する。	高大の連携を特徴とした「高大一貫講座」だけではなく、政治入門での国会見学や法律入門での法律事務所ツアーなど課外での活動も盛んに行われた。	B	大学からの一貫教育という特徴から、人材や施設などの教育環境の整備は一定の成果をあげている。一方で各担当者にはその教育環境を生かした教材研究が求められる。
	数学 各自の志望進路に合わせ、大学での専門科目を履修するのに必要な力を養成する。特に、論理的思考力および高度な計算力の育成を意識する。	3年次に4科目を設置し、志望進路先で求められる水準に合わせてカリキュラムを作成する。授業内で積極的に演習を取り入れ、自らの手で解決する経験を多く積ませる。	授業内で意識的に演習を取り入れることで、概ね進学後に求められる水準には達することができた。しかし、特に文系志望生徒についてはより丁寧なフォローが必要であった。	B	志望進路ごとに複数の科目を設置している利点を生かし、理系志望者にはより高度な内容を積極的に取り入れ、文系志望者には基礎の徹底を図るような演習を多く実施する。

評価項目	取組目標	具体的な方策	達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
選択科目	理科 必修科目を通じて修得した知識、技能をより高め、専門性の高い環境で活躍できる基礎を醸成する。	より専門性の高い実習を行い、また問題演習なども扱うことで、深い現象理解と高い解法スキルを養う。	講義・実験・演習を三位一体として、基本的な内容から応用の範囲まで理解を深めることができた。	A	生徒の多様性への対応の充実。Teamsやデジタル教材などのさらなる活用的一方、体験的な教育もより充実させ、バランスのとれた教育をめざす。
	保健体育 専門種目を実技・座学で学び、より理解を深めていく。また、将来の健康的な生活習慣の礎を築く。	必修で行っている内容以上の知識や技術の習得を心がける。その種目の楽しさを学び、生涯スポーツとして確立する。	授業での実技と座学に主体的に取り組み、基礎的な知識と技能の習得を図ることが出来た。	A	理解を深めるために振り返りを徹底し、自主的な練習時間を増やすことで技術向上と運動習慣の定着を図る。
	芸術 1・2年時に得た技能を生かし、創意工夫を凝らしたより高度な芸術表現を追求する。	より専門性を追求するために、音楽に3科目・美術に4科目を設置する。	各科目ともに1・2年時より深く内容に踏み込んだことにより、目標を達成することができた。	A	より生徒に寄り添う形で、進度に応じた個別指導の機会を増やしていく必要がある。
	外国語 英語 英語への理解を深め、社会及び生徒のニーズに応じた、より実践的な英語運用力を習得させる。	英語上級者向けのAdvanced English、中級者向けのEnglish through Cinema、英語検定試験対策、時事英語を開講し、少人数での主体的な学びを後押しする。	英語検定対策では少人数のメリットを生かし、SpeakingやWriting等、生徒に多くの言語運用を促すことができた。	A	英語文学・英語文化入門が開講され、Advanced Englishの履修者も増えるので、生徒のさらなる積極的な英語活動への関心を高めたい。
	第二外国語 既修者向けには学習の継続による運用力の向上を図り、未修者向けには多文化理解を通して教養を身につけさせる。	既修者、未修者それぞれに異なるアプローチを行い、4技能のバランスを意識しながら、異文化理解を深める。	生徒によって達成度は様々であるが、取組目標は概ね達成できた。	A	生徒がよりアウトプットをできるようにするため、授業展開など工夫・改善をしていきたい。
情報 生徒にとってややハードルが高い内容を含む「統計」分野の理解度を向上させる。	実習教材を工夫した上で実習時間を十分に確保することで、理解が進むように配慮する	実習時間を前年度までより多くとることができたが、実習教材の量と質については改善の余地がある。	B	実習教材の量と質の向上に加え、生徒にとってより身近な題材を取り上げることで、理解がより進むようにしたい。	
特別教育活動					
選択旅行	選択旅行の本来の目的である、生徒の興味や関心に基づいて「自ら選択する」ことを大切にしながら、安全面にも十分に配慮したコースの設置を目指したい。	・生徒の経済的負担を軽減するため、日帰りコースの設置も検討する。 ・夏期コースにおいては、暑さ対策として、携帯型WBGT計を希望コースに貸与する。	夏期7コース、春期11コースが、いずれも無事故で実施された。参加者の安全確保を最優先とし、大規模地震や津波など突発的な災害に備えるための緊急時避難経路を、各旅行のしおりに明記した。	A	引き続き、「熱中症対策」および「南海トラフ地震」への理解を一層深めるとともに、これらへの意識向上に努めたい。

評価項目	取組目標	具体的な方策	達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
安全管理					
設備	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の協力を得て、定期的に教育施設・設備の保守・点検を行い、事故防止や安全対策を図る。 ・生徒の動線に目を配りながら、安全面に配慮する。 ・校内の老朽化した部分の改修やバリアフリー化を行う。 ・必要な設備の新設を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的に各教育施設の安全点検を行う。必要に応じて設備の修繕・改善を行う。 ・第一校舎の外壁の修繕を行う。教室内の修繕およびシューズボックスの設置を行う。 ・杖・車いすなどでの移動が可能になるようバリアフリー化を進める。 ・3階の教室および廊下の窓に転落防止のための措置をとる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・部室棟を中心に大掃除、廃棄物処理、点検を実施し、危険個所の発見に努めた。 ・第一校舎の外壁の修繕（5年目）、一般教室の修繕（4年目）、シューズボックスの設置（3年目）を行った。 ・A棟・B棟のエレベーター設置と第一校舎の多目的トイレの増設に向けて検討を行った。 ・3階の教室および廊下に転落防止のためにストッパーを設置した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・教育施設・設備の保守・点検を定期的に行う。 ・校内の老朽化した部分の改修と新規設備の設置を引き続き行う。 ・バリアフリー化をさらに進める。
保健衛生	<ul style="list-style-type: none"> ・環境衛生調査を継続して行い、生徒の快適な学校生活のための環境を整備する。 ・保健衛生に関する情報を教員や生徒に適宜提供する。 ・生徒の病院受診の対応を円滑に行う。 ・各種感染症への対応を適切に行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年2回、環境衛生調査を継続して実施する。 ・関係スタッフと相互に協力し、迅速に教室環境の充実を図る。 ・食物アレルギー情報を担任と共有し、緊急時対応を準備する。 ・校医・看護師と連携し、有効な感染症対策を実施する。 ・感染者への迅速な対応とケアに留意する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・環境衛生調査を2回実施した。 ・食物アレルギー情報を担任と共有した。 ・感染症対策として、マスク着用、教室の換気対策を呼び掛け、発生した感染症について迅速に対応した。 ・生徒の病院受診について状況を共有した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・環境調査を引き続き実施していく。 ・各種感染症への対策を引き続き実施する。
危機管理	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒・教職員が安全で安心して学校生活を送ることができるよう、安全教育を推進し、安全管理を徹底する。 ・非常時の意思決定の方法について検討する。 ・非常事態が起こる前に、想定される対応策を準備する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・避難訓練の実施。 ・生徒・教職員対象のBLS講習の実施。 ・一斉連絡システムの活用および改善。 ・9月に備品の補充点検の実施。 ・南海地震クラスの大災害が発生したときなどのように対応すべきか、校内で議論する。 ・アレルギー対応の非常食を準備し、備蓄場所を確保する。 ・不審者対応について周知する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・避難訓練を実施した。 ・一斉連絡システムを活用し、運用の改善を図った。 ・アレルギー対応の非常食を備蓄する設備のための検討を行った。 ・危機管理マニュアルを作成した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・一斉連絡システムで保護者向けの情報発信を強化する。 ・アレルギー対応の非常食を備蓄する設備を引き続き検討する。 ・災害・不審者への対応について必要に応じて周知する。
運営					
図書	<ul style="list-style-type: none"> ・知の交流の場としての図書室の活用 ・読書推進だけでなく、大学での学びに繋げる資料の充実 ・書架狭隘化に対応し、有用な資料にアクセスしやすくする 	<ul style="list-style-type: none"> ・持続可能な展示やイベントなどを企画する。「選書ツアー」を継続して実施する。 ・卒業研究のセミナーを図書室で行うなどとして、図書室に入る機会を増やす。 ・古くて利用されない資料の移動等を行い、書架に余裕を持たせる。 ・書架見出しの設置 	<ul style="list-style-type: none"> ・選書ツアーを実施し、参加生徒が選書した図書を展示した。展示は秋の学校説明会参加者にも見てもらうことができた。 ・卒業研究のセミナーを図書室内で実施した。「健康講座」の図書室開催も含め、利用のきっかけ作りのひとつとした。 ・書架の狭隘化が進んでいた箇所資料を見直し、一部を集密書架へ移動、および書架の棚を増設した。 ・分類の内容がわかる 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・知の交流の場として図書室が活用されるよう、引き続き持続可能な展示やイベントなどを企画する。 ・授業利用、授業支援の推進 ・学術的価値の高くない、古くなって利用されていない資料を見直し、有用な資料にアクセスしやすくする。 ・わかりやすい図書の配置、掲示を工夫する。

評価項目	取組目標	具体的な方策	達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
学校いじめ防止基本方針に基づく取組の実施状況					
いじめ防止対策	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の声を受け止め、しっかり向き合う。 ・迅速に、組織的に対応する。 ・保護者、関係機関との連携を図る。 ・教員向け講座を実施し、教員のスキルアップを図る。 ・SNS上のいじめ、中傷への対応を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・担任による生徒・保護者との面談を実施する。 ・クラス、クラブを通して望ましい人間関係の構築を進める。 ・いじめ事案に対し、いじめ防止対策委員会を中心とした対応を行う。 ・あらゆる情報に迅速に対応する。 ・相談室の利用を促進するためのイベントを実施する。 ・一貫校いじめ問題連絡会で情報を共有する。 ・教員向け講座を実施する。 ・SNSについて生徒に注意喚起を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒・保護者との面談を必要に応じて実施した。 ・イベントや講演会を通じて生徒・保護者に相談室の積極的な利用を促し、相談室と連携した。 ・保護者向け講座を1回、教員向け講座を3回、生徒向け講座を6回実施した。 ・一貫校いじめ問題連絡会で情報を共有した。 ・SNS利用に関する注意事項を4月に配付し注意を喚起した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒、保護者との面談を積極的に実施するように機会を捉えて促す。 ・保護者・教員・生徒向け講座を開催し、幅広い参加を募る。 ・発生した事案に迅速に対応する。